

指定番号：92 ^{まえだとしつねがぞう} 前田利常画像 種別：絵画

前田利常画像として伝わる肖像画で、像主である利常は、寛永 16 年（1639）に隠居し、翌年、小松城に移った。正保 2 年（1645）、長男で加賀藩主の前田家四代光高が没し、その後を継いだ前田家五代綱紀が僅か 3 歳の幼少であったため、後見として小松城で政務をみた。農政の一大改革である改作法を実施し、地場産業を奨励、また、美術工芸を中心とする文化事業を推進した。万治元年（1658）10 月 12 日、66 歳で没する。

この画像は、右斜めを向く束帯姿の肖像画である。平緒を垂れ、左腰に飾り太刀を佩き、緑青や朱・茶・薄紫色などを施した纒縹縁の上疊にすわる。画面の背景はやや濃めの鼠色地で、上部に色紙形を三箇所設け、右方を緑青の絵の具で地色とし金泥で梅図を描く。真ん中は胡粉を塗り白地とする。左は朱地とし、金泥で松図を描く。

この肖像画が那谷寺に伝わった詳細な経緯は不明であるが、明治 24 年（1891）に前田家がこの画像を狩野派の篠原探谷に模写をさせている。その箱蓋裏に「原図加賀国江沼郡那谷寺蔵品／明治二十四年五月篠原探谷へ模写ヲ被命／但利常公御像ト云伝フ」との貼紙がある。明治 24 年の段階では前田利常画像として伝来したことがわかる。那谷寺は戦国時代、兵火にみまわれ一時荒廃していた。それを復興したのが利常である。利常は、加賀・能登の神社仏閣を積極的に保護し、その一つが那谷寺であった。この画像は、石川県内に所在する前田利常画像としては唯一であり、その意味でも貴重な肖像画である。

■ 所有・管理者：那谷寺（那谷町）



前田利常画像



前田利常画像（部分）